琉球大学学術リポジトリ

[書評] 山里勝己(YAMAZATO Katsunori)著『琉大物語 1947-1972』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本浜, 秀彦, Motohama, Hidehiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33988

［書　評］

山里　勝己（YAMAZATO Katsunori）著
『琉大物語 1947–1972』

琉球新報社（沖縄）　2010 年 2 月　286 頁

本　浜　秀　彦（MOTOHAMA Hidehiko）

第三者機関による認証評価が義務化されている近年ほど、日本の各大学が「建学の精神」を再確認することを求められている時代は、おそらくないのではないだろうか。いや、むしろ、言い得ているのは、多くの大学が、その「建学の精神」を、どのように「物語る」ことができるのかということで、右往左往しているという状況なのかもしれない。

評者が勤務している、開学 7 年目の私立大学も例外ではない。「建学の精神」をどのようにまとめ、それを記述するか。認証評価機関に提出する書類を作成するにあたって、学内のコンセンサスから執筆にいたるプロセスの中で、いちばん難航したのは、まさにこの「建学の精神」の項目である。「建学の精神」が、どのように大学のカリキュラムに「具現化」されているか。おそらく各大学とも、この点に細心の注意を払い、大きなエネルギーを注ぎ、定められた書類のフォーマットの中に捩じ込むべく、知恵を絞って、文書化してきた（している）に違いない。

そもそも、「志」で立つ私立大学は、大学が設立された経緯や、創設者の「理念」などの上に立つ、「志立」大学でなければならない。それがないのであれば、大学は存在理由を持たない。

では、国立大学の場合はどうなのであろうか。政府が設置した国立大学に、はたして「建学の精神」や理念などというものはあるのだろうか。

国立大学法人化した国立大学は、その中期目標で建学の理念を示すことが求められている。法人化という制度変更の中で、慌てて建学の精神や理念をこしらえるという作業が行われている大学もあるかもしれない。一方、その歩みの中で、大学の理念をつくりあげてきた大学もあるに違いない（例えば、菅真城「国立大学に建学の精神はあるのか？――広島大学、大阪大学の場合」『広島大学文書館紀要』第 10 号 2008 年を参照のこと）。いずれにしろ、私立大学だけではなく、国立大学も、「建学の精神」を、「物語る」ことが求められている時代であることは間違いなさそうである。

山里勝己著『琉大物語 1947–1972』は、『琉球新報』文化面に連載された文章に、加除訂正を施してまとめられた著作であり、もちろん、第三者機関からの評価を受けるために書かれたものではない。けれども、ある意味において、同書は、「大学」という、社会的にも、文化的にも大きな意味を持つ「装置」を、「物語る」ことの、さまざまな可能性を探る一冊にもなっている。

琉球大学が、日本の国立大学の中で、「特異」な建学の経緯を持っていたことは、沖縄の戦後史を少しでも聞きかじった人なら、知っているかもしれない。沖縄が米軍統治下にあった 1950 年に開学した同大は、統治者である米軍政府の布令を根拠に設立された経緯がある。そのため、「布令大学」、あるいは「植民地大学」といった性格付けで語られることも少なくなかった。また、開学してしばらくは小規模な大学であったことから、評論家の大宅荘一によって、「8 ミリ大学」という、蔑称めいた形容をされたこともある。

ただ、こうした「琉大誕生」の捉え方は、あまりにも断片的な情報に基づいて説明され、中途

半端に理解されてきたことに起因していると著者は指摘する。著者によると、琉大の「設立の経緯や背景の詳細はこれまでほとんど書かれていない」し、十分な解明もなされていないという。沖縄の戦後史を十分に理解するためにも、沖縄社会との大きな関わりを持ってきた同大学の、「誕生と成長についてでき得るかぎりくわしい記述を試みたい」との思いで綴り始めたのが、本書執筆の動機だと言う。

本書を書き上げた高揚感で一気呵成に書かれた感のある「あとがき」には、そのあたりがもう少し詳しく書かれている。琉大の歴史を「物語る」ことの意味について説明している箇所に注目すると、著者は、これまで「布令大学」、あるいは「植民地大学」として語られるような言説は、「ほとんど沖縄側の資料や証言に依拠していて、繰り返し同じ情報が伝えられてきた」ことにあると指摘する。つまり、これまで琉大を「物語」ってきた「マスターナラティブ」の元となってきた資料が、実はかなり限定されたものであったということである。

こうした「危うさ」を排するために、著者が徹底的にこだわったのが、ハワイ大学図書館やミシガン州立大学公文書館に保管されていた英文・和文で書かれた一次資料である。こうした資料の存在を、著者は、「従来の政治的価値判断にもとづく枠組みをいま一度ゆるやかにときほぐし、戦後沖縄と琉大を見る視点を再検討することを要請する」という。そうした資料を読み込み、それを基に、「沖縄史上初の高等教育機関」の設立の複雑さや、その社会的背景を文章に書き込むことで、琉大を語ってきた、これまでの「マスターナラティブ」に対抗する「カウンターナラティブ」を、新しく構築したのが本書ということになるだろう。

本書の構成は、第一章「ハワイの大学設立運動」、第二章「沖縄の大学設立運動」、第三章「開学」、第四章「ミシガン・ミッション」に、「ミード報告」とその解説を収録した資料編の第五章から成っている。第一章では、1940 年代後半のハワイで、沖縄に大学を設立しようという運動を繰り広げた、沖縄系の移民の人々でつくる団体「沖縄救済更正会」が、琉大の設立に果たした役割について、その中心にいた湧川清栄に焦点を当てて叙述している。続く第二章では、戦後の沖縄で大学の設立に向けて奔走し、当時沖縄民政府文教部長などの要職を務めた山城篤男らの動きを追っている。第三章では、琉大開学前後を、設立に向けた GHQ、米軍政府、沖縄民政府の関係者それぞれの動きを追っているほか、開学式典や草創期の授業の様子なども描いている。第四章では、1951 年から 68 年にかけて琉大に派遣されたミシガン州立大学からの教授団（「ミシガン・ミッション」）が、どのような性格を持ち、また具体的にどのように大学運営や教育に関わったかということが中心に書かれている。以上の構成に加え、本書には、「幻の伊波普猷学長」など、興味深いエピソードを紹介する、それぞれ 1 頁分のコラムが 40 話も収録されている。いずれも、それぞれの素材を膨らませると、さらにいくつもの「琉大物語」が語れそうなほどの充実ぶりである。

このように本著は、多くのことを詳細に叙述しているが、「物語」の最大のクライマックスを挙げるとすれば、第四章で詳しく書かれている、1956 年の「学生処分問題」になるだろう。学生が発行した『琉大文学』が反米的であるとされたことをきっかけに、関わった学生のうち六人が退学、一人が謹慎処分を受けたこの出来事は、沖縄の戦後史の中でも、米占領下の不自由さを象徴する「事件」として繰り返し説明されてきた（同誌には、のちにジャーナリストとして活躍する新川明の、米国の人種問題を抉った詩「『有色人種』抄」などが掲載されていた）。ただ、この「学生処分問題」の、これまでの一般的な捉えられ方は、学生を守る立場であるはずの琉球大学側が、統治者である米民政府の側に寄り、あるいはその圧力に簡単に屈し、学生たちを処分したというものであろう。

しかし、新資料などをもとに浮かび上がった、大学側の当時の対応は別のものだったということを著者は明らかにする。浮かび上がった新事実は、米国民政府民政官ヴァージャー准将が、高圧的に学生の退学処分を迫るのに対して、安里源秀学長ら大学関係者が、それを回避するため、ギリギリの交渉を続けたということであった。このことを描写した箇所は、これまできちんと書かれてこなかった沖縄の戦後史の一場面である。つまり、1956 年の学生処分問題は、大学側はあくまで学生の「謹慎処分」という「妥協案」で乗り切ろうとしたのであって、それを大学の存廃を迫ってまで強権的に介入し、学生たちを追い込んだのはヴァージャー民政官だったというその経緯が、著者によって明らかにされたのである。そのことを、「あとがき」の中で、著者は次のようにまとめている。

> 大学は民政府に「恫喝」されて「ただちに」学生を処分したわけではない。連日、深夜まで会議を続けながら、できるかぎりの抵抗を試みたのである。マスコミや政党や労組が直接に（弾圧の張本人である）ヴァージャー民政官を批判することなく沈黙する中で、唯一、抵抗したのは大学当局と学生たちにほかならなかった。

著者は、そこに、米軍占領下という戦後沖縄の「コロニアル」な状況において捨て身で抵抗した、沖縄の人々の姿を見出す。そして、その後の琉大の琉球政府移管を、「沖縄社会の抵抗が結実したもの」として見る。おそらくここに、本書における著者の最大のメッセージが集約されていると言ってもいい。つまり、琉大は、沖縄最初の高等教育機関を、「志」を持った多くの沖縄関係者が、占領―被占領の関係を「転倒」させて、奪い取った成果であるということである。

本書が、琉大誕生前後の出来事やその後の軌跡について、「物語ふう」に書かれていることにも、実は大きな意味がある。著者自身も述べているように、本書が採用しているのは、事実に寄りつつも、膨らみをもたせる（つまりフィクション性をもたせる）「クリエイティヴ・ノンフィクション」である。凡百の大学の記念誌などに見られる、平坦な記述ではなく、事実を「物語」として膨らませるその手法の責任は、書き手にある。言い換えれば、書き手が、書いているテーマに、どれだけアクチュアルに関わっているかということが、「物語る」ことのリアリティーを確保できるかどうかの鍵となるということなのだ。「物語る」という行為は、「公文書」などの権力側による記録や資料の中では、意識的あるいは無意識的に書かれなかった多くの事実や、出来事に関わった人々の息遣いを、あざやかに浮かび上がらせることができる。しかし、そのためにも、「物語」の中に書き手も深く関わり、そこに登場する実在した（実在する）人たちに魅かれ、共鳴し、あるいは反発し、憤ったりしなければ、登場人物たちに息吹を与えることはできない。

「クリエイティヴ・ノンフィクション」の手法は、第一章に登場する湧川清栄や、第二章に登場する、志喜屋孝信、山城篤男、金城豊子、阿嘉良雄らの動きを追う際に、実に効果的であり、強力な個性とバイタリティーを持ったこれらの人物の姿を、生き生きと描くことに成功している。中でも、第一章の、湧川が中心となったハワイにおける沖縄救済更生会による、大学設立のエピソードを、1989 年に湧川が琉大キャンパスで行った講演から書き始めているのは、前述したこの本のクライマックスである「学生処分問題」のくだりの伏線ともなっている。湧川の講演は、日米の沖縄政策への批判とともに、琉大が「御用大学」となっていることを批判し、最後に声を振り絞って「植民地大学には転落しないでください」と力説したものである。これを湧川が提起した「命題」として捉え、それを「物語」の冒頭に置き、続く展開で、琉大をめぐる沖縄の人々のさまざまな挑戦が語られるという構成は、実にドラマチックでもある。

本書のクライマックスである「学生処分問題」では、大学を追われた学生たちが背負った「苦

難」に対して、著者は、「物語的」(「詩的」と言ってもいい)に、次のように表現している。

> 処分された学生たちは、アメリカ合衆国に対して公正さを求める沖縄社会と、誕生したばかりの大学の「スケープゴート」となった。すなわち、彼らは、政治的に未成熟な社会と、布令に呪縛された大学の苦しみを負わされて荒野に放たれた「贖罪の山羊」であった。

こうした表現にも、著者のまぎれもない「主観」(責任を伴った価値判断)が入り込んでいる。しかし、こうした表現には、「語られる」ことによって(つまり「物語」によって)人々が救われることの可能性を見出すことができるに違いない。

「あとがき」で、改めて著者は、琉球大学の歴史は、「沖縄の戦後社会の歴史を色濃く反映する」と指摘する。その歴史を知り、「物語」ることは、「沖縄に住む私たちの自身の歴史を知ることともかさなる」という。だからこそ、「琉大物語」は「いまだ未完の物語」であって、今後も「補完され」「書き直され」ながら、「ディテールを埋めていく仕事が続くこと」の重要性を訴える。

本書が、琉大を「物語る」対象としているのは、タイトルにもあるように、1947年から72年までである。「1972年以後」の琉大が「物語」の中に叙述された本だとすれば、私の手に余るものになっていただろう。それは、72年の「本土復帰」に伴って国立大学に移管した琉球大学や、国立大学法人化した後の琉球大学が、本書で語られた琉球大学と、はたして同じ大学なのかということを判断をする材料を、全く持ち合わせていないからである。おそらく琉球大学の教職員においても、「1972年以前」の琉大を知る人たちは、あと十数年もすると大学の現場からは間違いなくいなくなる。だからこそ、著者は、「琉大物語」をこのタイミングで世に送り出したのではないのだろうか。

著者が綴った「琉大物語」は、琉大の誕生、成長に関わった多くの人々たちの、それぞれの「物語」でもある。地上戦で荒廃した沖縄や、戦後のハワイで奔走した人々、米軍政府関係者、沖縄の教育者……。こうした人々が、それぞれ重要な「ファクター」として機能しなければ、もしかすると琉大は別のかたちになっていたかもしれない。また、アメリカ文学研究者であったミシガン州立大学のディヴィッド・ミードが、同大学部長宛てに報告書を残していなかったら、今回明らかになった「学生処分問題」の事実も埋もれていたかもしれない。そう考えると、彼の報告書を鮮やかに読みとったのが、アメリカ文学の専門家である著者であるという「歴史」の妙も、また興味深く思えてくる。

『琉大物語』で書かれた「物語」は、著者が言うように、沖縄の戦後史の叙述につながるものだろう。しかし、一方で(当然ながら)、琉球大学という大学の、「ベタ」な、「ノンフィクション」でもある。著者の、学問、大学、教育、そして社会(沖縄)にコミットメントする、大学人としてのスタンスや思いは、「物語」の端々から、ストレートに、熱く伝わってくる。

大学の存在そのものを支える大学の理念に、新たな「物語」を繋いで、大学の機能や役割を、さらに広げていくことができるか、あるいはその理念というものが、ただ単に、第三者機関に提出される書類用に書かれる「作文」に止まるのか。

その分岐点では、学問と社会に対する優れた批判力を併せ持った大学人が、大学の「志」=理念を築くだけではなく、その「バトン」を、後に続く者たちに確実に引き継いでいけるかということが大きな鍵になりそうだが、そのひとつの実践を本書で著者が行ったように私には思えた。

(沖縄キリスト教学院大学)